

会話ダイアログ暗唱に従事させる外国語指導法がスピーキング時の定型表現の使用と暗記学習に及ぼす影響に関する基礎研究

松崎武志

要旨

Formulaic Sequences (定型的な単語 [あるいは形態素] の連続: 以降 FSs) は我々の記憶内に独立して保持されている。本研究は、第二言語習得における FSs の役割、および指導・学習ストラテジーとしての FSs 暗記の効果を調査する。具体的には、留学中に役立つことが期待される FSs を含むダイアログ集の暗記と暗唱タスクを一学期間に渡って与えた学習者を研究対象としたプロジェクトを報告する。

FSs とは、一続きの言語情報を指すわけだが、中でも「各構成要素と残りの要素との関係が比較的固定化されており、かつ、連続体の一部を同一カテゴリーの別のものに置き換える際に比較的制限のある連続」と定義することができる (Wray & Perkins, 2000)。FSs 現象は、長期におよぶ応用言語学の関心事であり (e.g., Bolinger, 1976; Fillmore, 1979; Pawley & Syder, 1983; Wray, 2002)、コーパス言語学の核であり (e.g., Sinclair, 1991)、そして多様な“レキシカル”指導アプローチの中心である (Lewis, 1993; Nattinger & DeCarrico, 1992; Willis, 1990)。FSs が大きな関心を引き寄せる理由 (そして、その厳密な定義付けが難しい理由のひとつ) は、FSs が語彙の相当部分を占め、メッセージの理解と発信において最も重要な役割を担っていることにある。このため、「FSs をいかにして教えるべきか？」という問いは言語教授法において大きな関心事となっている。

本論文の第1章では、論文内で報告する研究の背景を議論する。その際、研究フォーカスが (特に日本の大学という) 外国語環境における文章暗記 (text memorization) による FSs 指導であることを述べる。

第2章では、まず、関連文献で議論されている多様な FSs の特徴を検討する。本章はまた、FSs の概念を検討し、人がいかに言語チャンクを処理し習得するかについて詳細に述べる。本章の最後では、FSs と言語学習の関係性を説明し、外国語環境での学習におけるその関係性の示唆にも触れる。

第3章は、言語情報の処理と保持について議論する。本章はまず、言語理解

と発信に関する理論モデルを検討する。次に、認知科学の観点から見た情報処理、学習について議論する。その後、第二言語における FSs の習得を困難にする言語特性、そして、思春期以降の学習者が外国語環境で学習する際の制約について議論を展開する。本章の最後では、それまでの議論を踏まえた言語処理・習得の統合的モデルを提示し、このモデルの含意を説明する。

第4章は、次章以降で報告していく本研究の導入として、まず、前章までの議論を踏まえた3つの問題点について議論する。3つの問題とは、すなわち、【1】

「特に大人を対象とした外国語環境での指導において FSs にフォーカスした指導をすべきか?」、【2】「フォーカスすべきである場合、どのような FSs を教えるべきか?」、そして【3】「どうやって FSs を教えるべきか?」である。これら3つの問題に対して、前章までに議論してきた様々な理論モデルに鑑みながら、それぞれ、答えを多角的に検討していく。とりわけ問題3については、多様な指導アプローチの効果や注意点を議論していく。本章の最後では、本研究のテーマとなっている文章暗記の指導効果に関する主要な先行研究のレビューを行う。このレビューでは、以下の点を指摘する。まず、FSs 使用はオーラル面において最重要であり FSs の即時的な使用を適切に計測するためにはスピーキングによる能力測定が不可欠と思われるにも関わらず、これまでの実証研究にはスピーキングテストによる効果検証が欠如している。第二に、特定の暗記指導法の認知負荷に差を設定した複数処置群についての有意差研究、そして（一学期間という）比較的長期の暗記指導を施した場合の効果研究も不足している。さらに、特定の暗記指導アプローチを実施することで学習者の暗記への態度がどう変わるかについての検証がなされてきていない。

第5章では、まず、第4章の最後で述べた文章暗記に関する先行研究の不足点を踏まえ、本研究における研究課題を次のとおり挙げる。【研究課題1】指導開始前に準備しておいたダイアログ集の全文暗唱あるいは部分暗唱を促すことにより、一学期間、暗記作業に従事させることができるか、また両方法の間に有意差は見られるか。【研究課題2】課題1で示した全文暗唱と部分暗唱指導により、FSs を用いたスピーチ産出を促すことができるか、そして両方法の間に有意差は見られるか。【研究課題3】課題1で示した両方法により1分間当たりの産出シラブル数で計測するスピーチ流暢さを向上させることができるか、そして両方法の間に有意差は見られるか。【研究課題4】両方法により、コミュニケーション力を伸ばすために文章暗記をすることに対する学習者の態度を（より）

肯定的に変化させることができるか、また両方法の間に有意差は見られるか。

【研究課題5】両方法がどの程度機能するかについて、どういった個人差が影響を及ぼすか。

第5章では、次に、研究方法の詳細を記述する。まず、研究協力者については、処置群1 (TG1) が12名、処置群2 (TG2) も12名、対照群 (CG) が11名の計35名が本研究に参加した。本研究で用いる FSs については、事前に、語数合計が 3,182 となるダイアログ集を準備しておいた。この教材を用い、TG1 そして TG2 の指導を研究者が行った。各回の授業は、90分授業の最低3分の1以上の時間を次の活動に充てた。まず、研究者がダイアログ集から順番にいくつか、文法、語彙、発音等の指導を行った。続いて、各学生には、導入済のダイアログの中からいくつか選択したものをその場で覚えるか、あるいは予習で覚えてきたものの再確認をさせた。次に、学生同士で暗唱をさせた。相手がいない学生には研究者が暗唱パートナーとなった。TG1 と TG2 の指導法における最大の違いは、前者にはダイアログの全文暗唱を課し、後者には特定の FSs 箇所のみ覚えれば済む部分暗唱を課したことである。このため、部分暗唱群は、全文暗唱群と比較して、約3分の1に相当するテキストを暗唱することになった。指導開始時と終了時には、英語のスピーキングテストを実施し、日本語による疑似インタビューと選択肢形式のアンケート回答による調査も行った。CG に対しても、同じテストを実施し、同じインタビュー・アンケートへの回答をさせた。

第6章は、処置群によるダイアログ暗記、および全群のスピーキングテスト・アンケート回答の統計データを提示する。まず、処置群によるダイアログ暗記については、TG1、TG2 いずれも効果的になされたことがわかった。スピーキングテスト Part 1 (短文音読タスク) では、両処置群が CG に対して有意なスコア向上を見せ、TG1 はさらに TG2 に対しても有意な伸びを示した。スピーキングテスト Part 2 (短文翻訳・回答タスク) では、学習したダイアログ表現をそのまま再現するプロンプトでは両処置群が CG に対して有意なスコア向上を見せたのに対して、回答の適切さについては TG1 にのみ有意なスコア向上が見られた。スピーキングテスト Part 3 (長文回答タスク) では、ダイアログ集にある FSs の使用について CG のみ有意なスコア向上が見られ、1分当たりの産出シラブル数で計測する流暢さについては TG2 のみ有意なパフォーマンスの向上が見られた。指導開始時と終了時に設定したアンケート項目については、いずれも

有意な変化は見られなかった。最後に、指導終了時にのみ設定したアンケート項目については、「様々な言語項目を学習するためにテキスト暗記学習をすることへの好意的な態度変化」に関する項目において TG1 のスコアが TG2、CG を有意に上回るなど、いくつかの項目において群間の有意なスコア差が見られた。

第7章では、各研究課題に関する発見について議論する。まず、課題1については、全文暗唱、部分暗唱いずれも一学期間に及んで暗記作業に従事させられることがわかった。課題2については、覚えた FSs をそのままスピーキングで用いることについては部分暗唱群の方が全文暗唱群よりも有意な伸びを見せたが、他のテスト結果も含めて総合的に解釈すると、全文暗唱の方が部分暗唱よりもさらに効果的に定型表現によるスピーチ産出を促すと考えられる。追加で実施した n-gram 分析では、解釈における注意点はあるものの、全文暗唱群のみ「長文回答タスク」において有意なスコア向上が見られた。スピーキング回答内容の適切さにおいても、限定的ではあるものの、全文暗唱群にのみ有意なスコア向上が見られた。そして、発音問題のスコアに関しては、両処置群ともに有意な向上が見られたが、全文暗唱は部分暗唱と比べても有意な伸びが見られたのである。課題3に関しては、1分当たりの産出シラブル数で測る流暢さについて部分暗唱群に有意なスコア向上が見られた。ただし、全文暗唱群は、流暢さを犠牲にして産出内容に注力を傾けていた可能性がある。課題4については、全文暗唱のみ、アンケート回答において、文章暗記に対する肯定的な意識変化が有意に見られた。このことは、全文暗唱アプローチを採用する動機となりうる。最後に課題5については、スピーキングテストの高得点者と低得点者を各群から3名ずつ選び、彼らのテスト結果およびアンケート回答と疑似インタビュー回答に言及しながら1名ずつ分析を試みたが、様々な個人差がテスト結果、アンケート回答に影響を及ぼしていた可能性がある。例えば、本研究中に授業外で海外から来ている留学生と交流の多かった研究協力者は、顕著にダイアログ集の FSs 使用のテストスコアが伸びていた。別の例としては、コミュニケーションでよく使われる表現が便利であることはわかっていつつも、それらを覚えることに対して様々な理由で抵抗感を感じている学生は、暗唱はしても、事後テストにおける FSs 使用の大きな増加は見られなかった。

第7章の結論部分では、本研究におけるデザイン上の問題をいくつか指摘し、それらを考慮しても、本研究は先行研究で扱われていない研究課題を扱っており、したがって、FSs 指導に関心のある言語教師、そして FSs を研究テーマとし

ている研究者にとって新たな知見を提示することが期待される旨を述べる。最後に、本研究でも未着手の FSs 研究領域、そして、本研究のデータ分析過程で新たに見つかった FSs 指導の研究領域について指摘して終える。